

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和8年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第2号（5月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401
南さつま市金峰町大野 2200
TEL:099-245-1081（代表）
099-245-1157（直通）
FAX:099-245-1149



ホームページアドレス：<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理、安全使用
2. 作物に対する安全 適期、適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川、湖沼、海等への汚染防止)
(養蚕、養蜂等への危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

令和8年度 病虫害発生予報 第2号

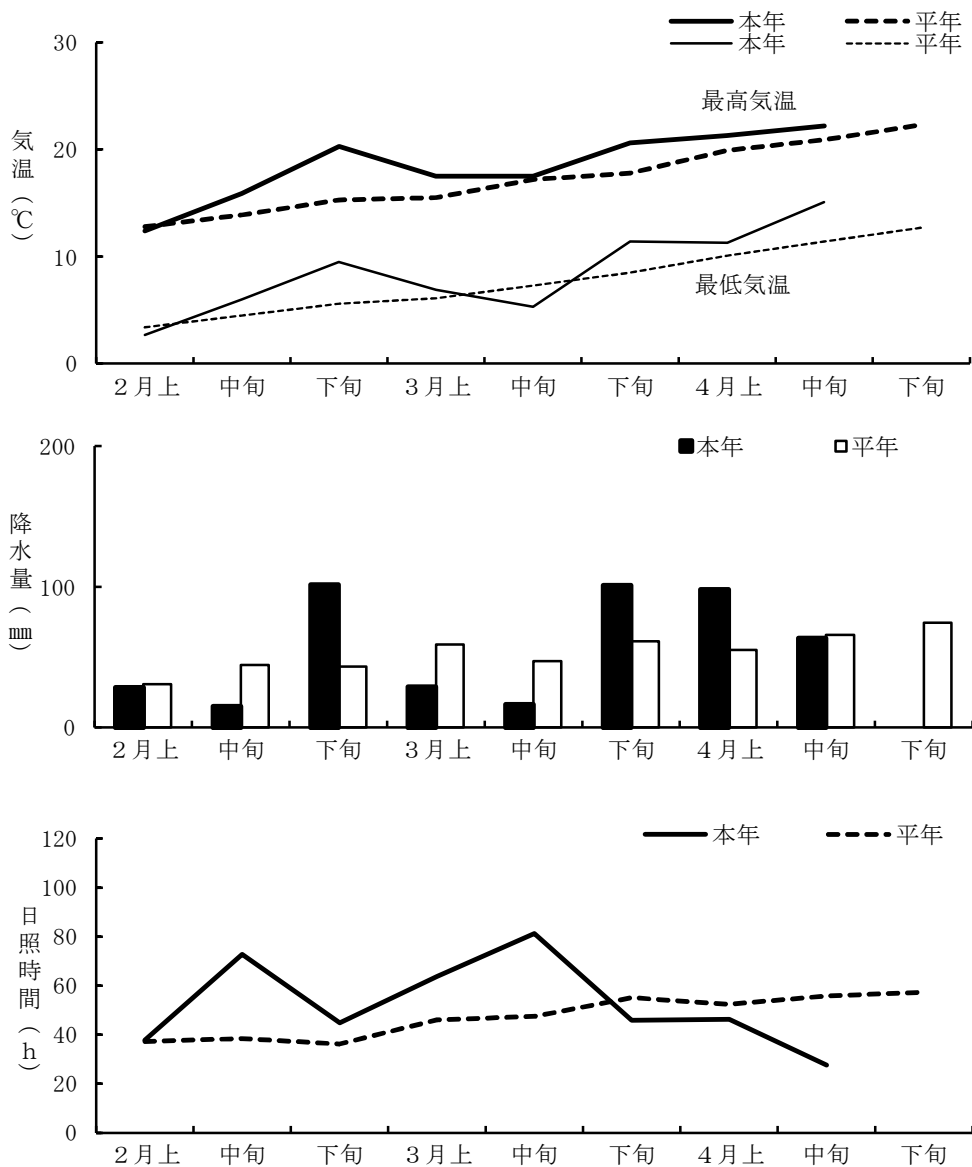
令和8年4月28日
鹿兒島県病虫害防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（4月25日～5月24日） 令和8年4月23日 鹿兒島地方気象台発表

要素	地域	確率 (%)			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	10	40	50	九州南部、奄美地方ともに気温は高く、降水量はほぼ平年並み。九州南部の日照時間は平年並みか少ない、奄美地方はほぼ平年並みの見込み。
	奄美地方	10	40	50	
降水量	九州南部	30	30	40	
	奄美地方	30	30	40	
日照時間	九州南部	40	40	20	
	奄美地方	40	30	30	

II. 2～4月の気象情報（鹿兒島地方気象台 観測点：加世田）



【 病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要 】

作 物		病 害 虫 名	発 生 量	
			現 況	予 報
普通作物	早期水稲	葉いもち	並	並
	サトウキビ	メイチュウ類（奄美地域）	並	やや多
野菜	トマト	灰色かび病	やや多	やや多
		うどんこ病	多	多
		褐色輪紋病	多	多
		コナジラミ類	多	多
	ピーマン	斑点病	並	並
		うどんこ病	多	多
アザミウマ類		並	やや多	
花き	キク（施設）	ハダニ類（県本土）	多	多
		アザミウマ類（県本土）	やや少	並
果樹	カンキツ	そうか病（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
		かいよう病（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	少	やや少
		〃（奄美地域）	並	やや多
茶樹	チャ	炭疽病	並	やや多
		チャノココクモンハマキ	並	並
		チャハマキ	やや少	やや少
		チャノホソガ	多	多
		チャノミドリヒメヨコバイ	少	少
		チャノキイロアザミウマ	並	並
		カンザワハダニ	多	多

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. 早期水稲

(1) 葉いもち

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生面積率0%（平成0%）：並

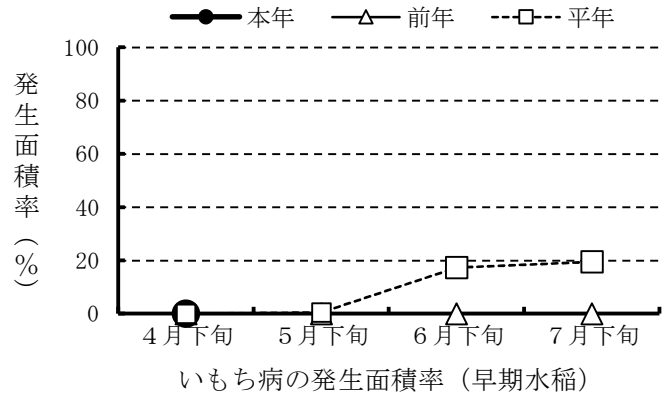
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 本病の常発地や前年の多発ほ場

は発生に注意し、発生を認めたら直ちに防除を行う。

(イ) 置き苗は発生源となることが多いので、補植後、速やかに処分する。

(ウ) 窒素肥料の多施用は発生を助長するので、避ける。



2. サトウキビ

(1) メイチュウ類 (カンシャシン
クイハマキ、イネヨトウ)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 奄美地域

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 46%（平成 63%）

：低い

20 株あたり被害株率 2.2%

（平成 2.2%）：並

一部地域で発生程度の高いほ場が認められている。（+）

（徳之島：甚発生 2 ほ場、多発生 1 ほ場、中発生 1 ほ場、奄美大島：中発生 1 ほ場）

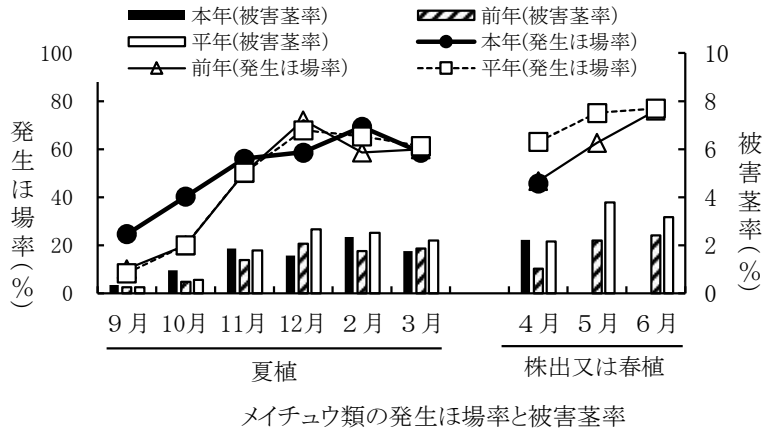
(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 生育中のほ場では、散布剤による防除が速効的に被害を抑制する。発生が多い場合は初回散布の 7～10 日後に追加防除を行う。

(イ) ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるので除草を徹底する。



防除に関する今月の留意事項

1. サツマイモ基腐病

<採苗>

- (1) 採苗時に用いるハサミは、こまめに消毒（火炎滅菌または丁寧な水洗と拭き取り）する。
- (2) 採苗は、株の地際から5 cm以上切り上げて行う。
- (3) 苗消毒は、必ず採苗当日に行う。なお、消毒液は必ず使用する当日に調整したものを用いる。

<本ぼ>

- (1) 排水が不良なほ場では、植付前に耕盤破砕（地下排水の促進）や明渠の施工（表面排水の促進）などの対策を行う。定植前にはほ場の排水機能（明渠等）とは場に隣接する排水路の点検を必ず実施し、ほ場からの排水口は排水路に確実に接続する。
- (2) 発病前の予防散布に努める。

サツマイモ基腐病の生態と防除に関する詳しい情報は、鹿児島県(https://www.pref.kagoshima.jp/ag06/documents/documents/74570_20240315133011-1.pdf)、農研機構(https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/motogusarebyo_hatsubyorisuku_teigen_manial.pdf)をご覧ください。



鹿児島県
サツマイモ基腐病防除
対策マニュアル(第4版)
令和6年3月改訂



農研機構
「本圃におけるサツマイモ基腐病
発病リスク低減技術」マニュアル
令和7年3月

Ⅱ. 野 菜

1. トマト

(1) 灰色かび病

ア 予報内容

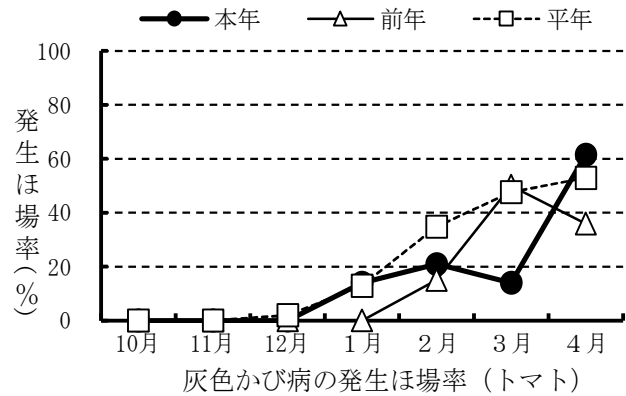
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率 62% (平年 53%)
：やや高い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウスの通風換気を十分に行い、過湿にならないよう努める。
- (イ) 果実部やへたの付近に付着する花弁は本病の発生源となるので、こまめに除去する。
- (ウ) 発病葉や発病果実はビニール袋等に入れて施設外へ持ち出し、適切に処分する。
- (エ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布を行う。



(2) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

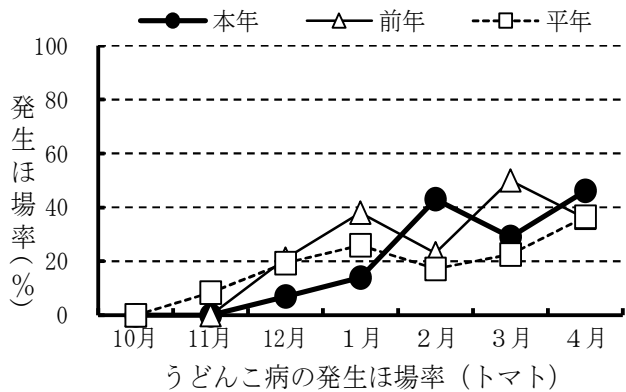
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率 46% (平年 36%)
：やや高い

発生程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 薬液は葉裏に十分付着するよう散布する。
- (ウ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布を行う。



(3) 褐色輪紋病

ア 予報内容

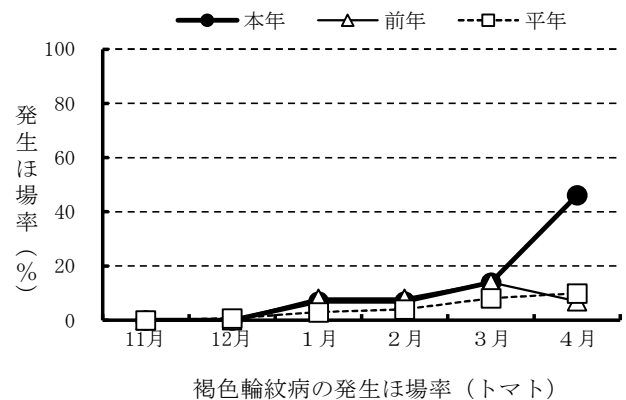
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率 46% (平年 10%)
：高い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウスの通風換気を十分に行い、過湿にならないよう努める。
- (イ) 葉に輪紋状の斑点の病害が認められた場合は、発病葉を早めに除去し、施設から持ち出して適正に処分する。



(ウ) 発生初期から薬剤散布を行う。

(4) コナジラミ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

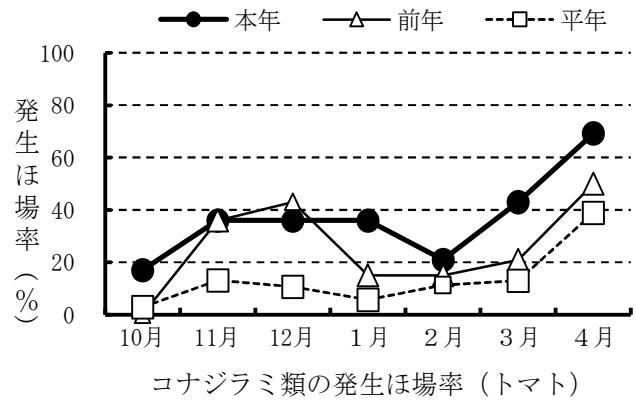
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率 69% (平年 39%)
：やや高い

発生程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布に努める。
- (イ) 農薬によっては感受性が低下しているので、散布後は防除効果を確認する。
(令和6年度技術情報第25号、令和6年12月26日付・二次元コード参照)
- (ウ) 農薬によっては、マルハナバチに影響があるので選定に注意する。



2. ピーマン

(1) 斑点病

ア 予報内容

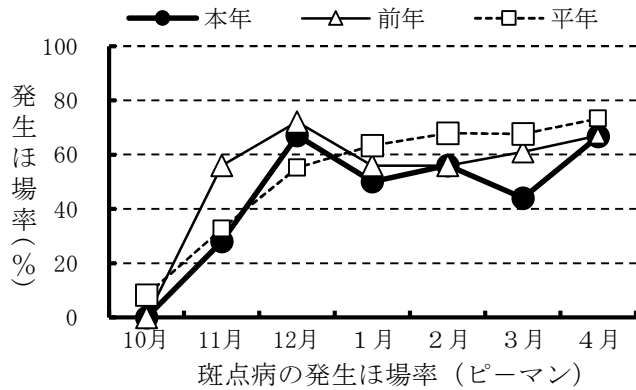
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 67% (平年 73%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。
- (ウ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布を行う。



(2) うどんこ病

ア 予報内容

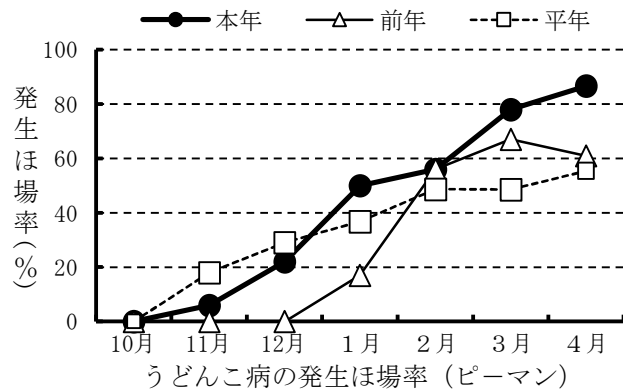
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率 87% (平年 55%) : 高い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 薬液は下位葉や葉裏に十分付着するように散布する。



(ウ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布を行う。

(3) アザミウマ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

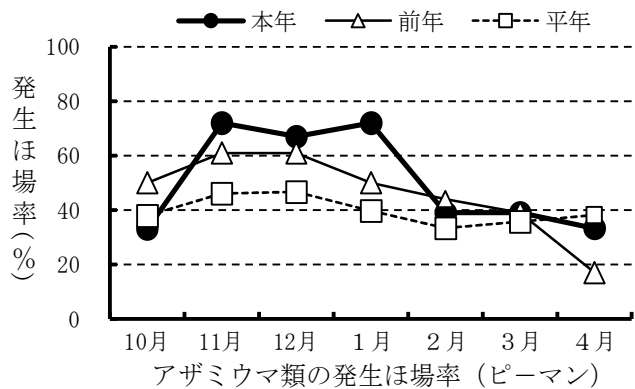
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 33% (平年 38%) : 並

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウス開口部等に粘着トラップを設置し、発生状況を把握して適期防除に努める。
- (イ) 花や新芽の中など、葉液のかかりにくい場所に生息するので、散布は丁寧に行う。
- (ウ) 天敵を放飼しているほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。
- (エ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布に努める。



防除に関する今月の留意事項

1. トマト黄化葉巻病 (TYLCV)、キュウリ/メロン退緑黄化病 (CCYV)、
キュウリ/メロン黄化えそ病 (MYSV)

本年4月の調査で、トマト黄化葉巻病 (発生ほ場率8%、平年4%)、3月の調査で、キュウリ退緑黄化病 (発生ほ場率10%、平年44%) の発生を認めた。トマト黄化葉巻病やキュウリ/メロン退緑黄化病の病原ウイルスはタバココナジラミによって、キュウリ/メロン黄化えそ病の病原ウイルスはミナミキイロアザミウマにより媒介される。今後これら媒介虫の活動が活発となり、ウイルスを保毒した成虫がハウスの外に飛び出すので、以下の防除対策を徹底する。

- (1) 媒介虫がハウス外へ飛び出すのを防ぐため、栽培終了まで防除を徹底するとともに、防虫ネットは継続して設置しておく。
- (2) 栽培終了後は抜根し、植物が十分枯死するまで、必ず蒸し込む。
- (3) 残渣処理剤を使用する際は、ラベルをよく確認して処理する。

2. イチゴのハダニ類

<本ぼ>

栽培終了後の本ぼから苗床への侵入を防ぐために、以下の防除対策を徹底する。

- (1) ハウス外への拡散を防ぐため、栽培終了まで防除を徹底する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため同一系統薬剤の連用を避け、気門封鎖剤など作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布に努める。
- (3) 栽培終了後は抜根し、ハウスを確実に密閉して、植物が十分枯死するまで、必ず蒸し込む。

<苗床>

本ぼでの発生は苗からの持ち込みによることが多いので、苗床で以下の防除対策を徹底する。

- (1) 気温の上昇とともに急激に増殖するので、管理作業時に注意深く観察し、早期防除に努める。
- (2) 寄生葉や摘葉した葉は、ほ場外に持ち出し処分する。
- (3) 農薬の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから、葉液が葉裏にもかかるよう丁寧に散布する。
- (4) 薬剤感受性の低下を防ぐため同一系統薬剤の連用を避け、気門封鎖剤など作用性の異なる農薬

(RAC コード参照) のローテーション散布に努める。

3. イチゴ炭疽病<苗床>

イチゴ炭疽病は、風雨や灌水のはね上がりにより感染が広がる。また、気温の上昇に伴い発生が多くなり5月上旬から感染好適期となる。健全な苗を確保するためにも、以下の防除対策を徹底する。

- (1) 雨よけ、排水対策及び防風対策を徹底する。灌水はできるだけ水滴が小さくなる灌水チューブ等を用い、適正な水管理に努める。
- (2) 古葉は潜在感染している場合が多いので、新葉展開後は降雨時を避けて摘葉する。
- (3) 生育不良の親株や萎凋した苗は、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。
- (4) 予防散布は10~14日間隔で行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。
- (5) 育苗ほ場周辺や育苗ベンチ下の除草を徹底する。

4. バレイショの収穫後の耕種的病害対策

収穫残さが次作での疫病、菌核病、軟腐病及びそうか病等の一次伝染源になるので、収穫後は以下のは場管理を適切に行う。

- (1) 収穫後の発病茎葉やいも、くずいも等は、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。
- (2) 疫病、菌核病の発生が多く、残さの持ち出しが困難なほ場では、天地返しにより残さを土中深く埋没する。
- (3) イネ科牧草等の作付けによる輪作に努める。

5. 野菜類全般の残さ処理について

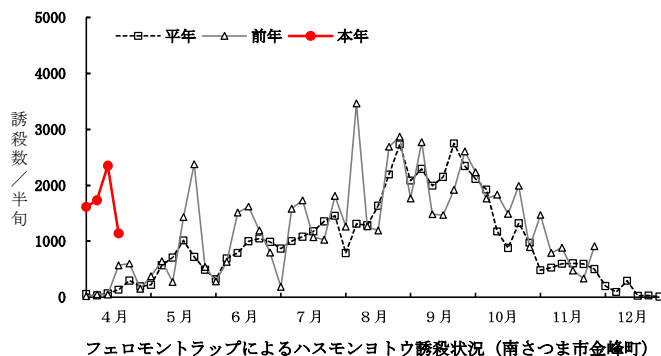
露地野菜等の残さは、次作に対して様々な病虫害の伝染源(発生源)になる。多くの作物に感染する菌核病や軟腐病等には、特に注意が必要である。長期間放置してほ場の病原菌密度や虫数を増加させないように、収穫終了後はできるだけ速やかに残さ処理を行う。

- (1) 発病茎葉・果実を含め、収穫後の残さは、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。
- (2) ほ場外へ残さの持ち出しが困難なほ場では、複数回の耕耘により残さを早めにすき込み分解を促す。

6. 野菜類・花きのハスモンヨトウ

ハスモンヨトウは、南さつま市金峰町に設置しているフェロモントラップの誘殺虫数が4月に入り平年よりも多く推移している。本虫は、広食性で多くの農作物を加害する。今後野菜・花きを中心に被害が予想されるため、以下の点に留意しながら適期防除に努める。

- (1) 若齢幼虫は集団で表皮を残して食害し
白変葉を生じるので、ほ場を見回り早期発見に努める。
- (2) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (3) 中・老齢幼虫になると農薬が効きにくいので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。
- (4) ジアミド系農薬に対して感受性低下が認められる。他の使用農薬も含め、散布後の効果を確認する。



フェロモントラップによるハスモンヨトウ誘殺状況(南さつま市金峰町)

Ⅲ. 花き

1. キク

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率 40%（平年 31%）
：やや高い

発生程度の高いほ場を認めた（+）

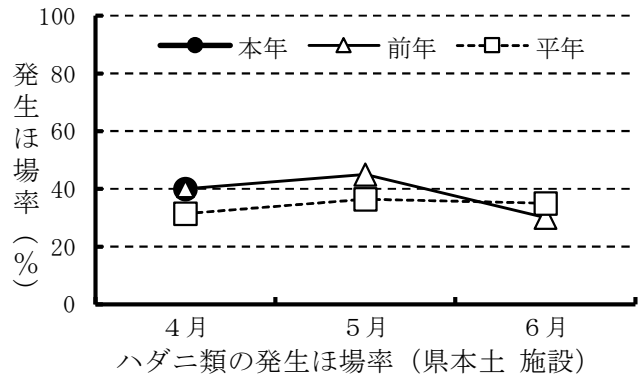
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生するケースが多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) 薬液は葉裏までよく付着するように散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 20%（平年 31%）
：やや低い

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類の発生動向を把握するためには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。なお、クロゲハナアザミウマの誘引効率はやや低いと思われる。

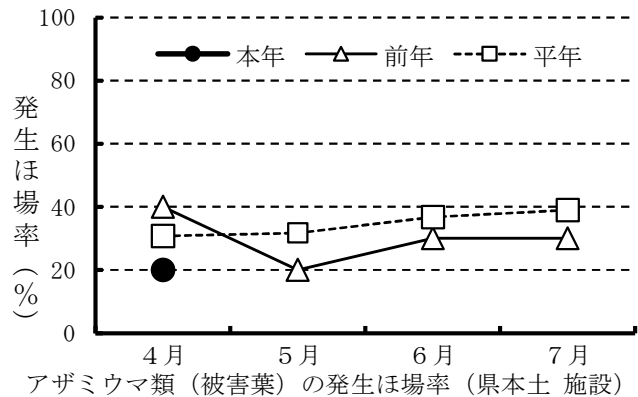
(イ) クロゲハナアザミウマは中下位葉に主に寄生しているため、よく観察して早期発見に努め、発生が認められた場合は、薬液が中下位葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) アザミウマ類は、キクえそ病の病原ウイルス（T S W V）とキク茎えそ病の病原ウイルス（C S N V）を媒介するため、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。

(オ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。

(カ) 母株や苗は導入時に、アザミウマ類の寄生やウイルス病の発生がないか確認し、持ち込まないようにする。



IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) そうか病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少

奄美地域 やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：やや少

発生ほ場率 0% (平年 2%) : やや低い

発病葉率 0% (平年 0%) : 並

<奄美地域>

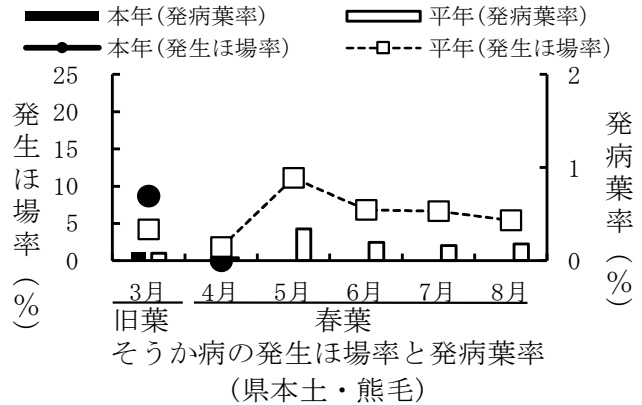
(ア) 調査結果(春葉) 発生量：やや少

発生ほ場率 0% (平年 6%) : やや低い

発病葉率 0% (平年 0.1%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 開花期以降のデランフロアブルとマシン油乳剤の近接散布は、薬害を生じる恐れがあるので散布間隔は30日以上あける。



(2) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：やや少

発生ほ場率 2% (平年 5%) : やや低い

発病葉率 0% (平年 0.1%) : やや低い

<奄美地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：並

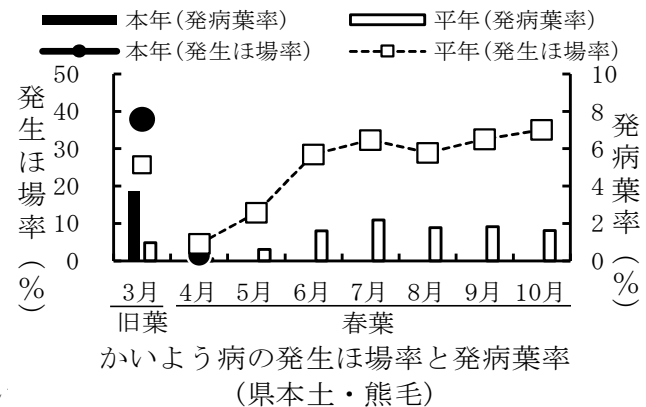
発生ほ場率 0% (平年 0%) : 並

発病葉率 0% (平年 0%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 銅水和剤の使用にあたっては、薬害を軽減するために炭酸カルシウム剤を必ず加用する。

(イ) 強風雨等による葉や果実への傷口発生を防ぐため、防風ネットの設置や防風樹の管理に努める。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少

奄美地域 やや多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：少

発生ほ場率 0% (平年 7%) : 低い

寄生葉率 0% (平年 0.4%) : やや低い

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：並

発生ほ場率 14% (平年 9%) : やや高い

寄生葉率 2.0% (平年 0.2%) : 高い

発生程度が低い (-)

(イ) 気象予報

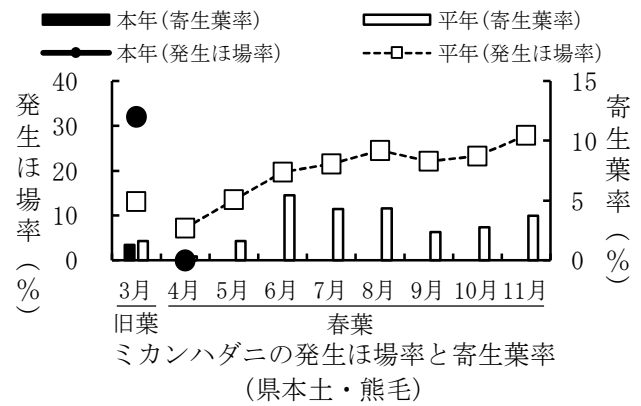
気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉あたり雌成虫数 0.5~1.0頭(寄生葉率で30~40%)を目安に防除する。また、薬剤抵抗性を生じさせないため、同一系統、同一薬剤の殺ダニ剤の使用は年1回とする。

(イ) 殺ダニ剤の効果が低下したほ場では、今後、多発することが懸念されるため、夏季用マシン油乳剤(97%)を主体とした防除を行う。

(ウ) ただし、夏季用マシン油乳剤は散布後に、油浸斑の発生や光合成低下等による果実品質への影響が懸念されることから、高温時の使用を避ける。そのため、使用時期は、県本土では温州6月上旬~7月上旬まで、中晩柑類7月下旬まで、熊毛・奄美地域の中晩柑類は梅雨明けまでとする。



V. 茶 樹

1. チャ

(1) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 (令和7年10月：秋整枝後残葉)：並
発生ほ場率 51% (平年 57%)：並

1㎡当たり病葉数 13.1枚 (平年 5.9枚)：多

(イ) 気象予報

気温：高い(+)

(ウ) その他

一番茶生育期の3月下旬～4月上旬における降水量が平年より多かった(+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) やぶきた、おくみどりなどの本病に弱い品種や多発ほ場では二番茶萌芽～1葉期に防除する。

(イ) 多発状態の続く茶園は、二番茶後に整・剪枝(深刈り等)により伝染源を除去する。

(2) チャノコカクモンハマキ、チャハマキ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

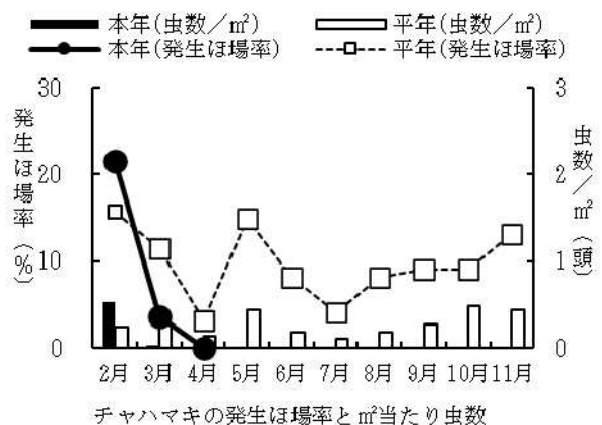
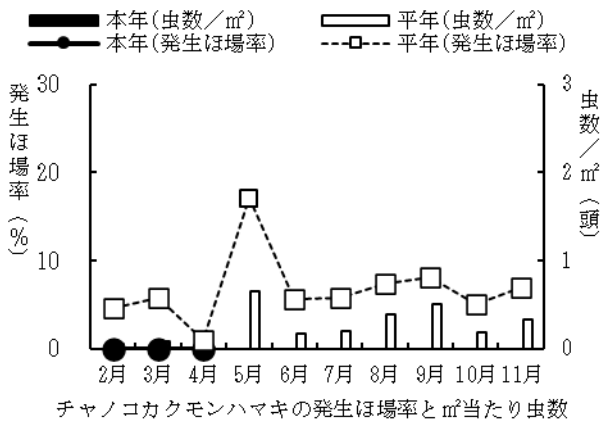
(イ) 発生量 チャノコカクモンハマキ 並
チャハマキ やや少

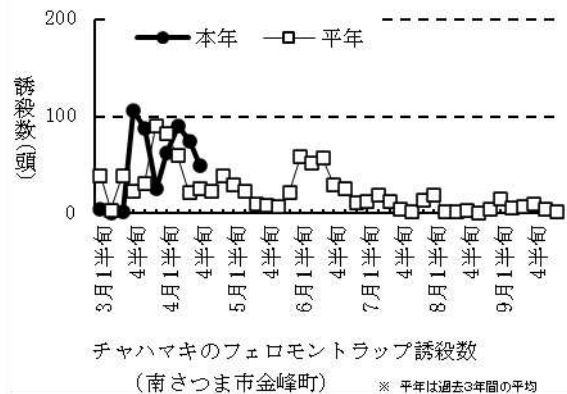
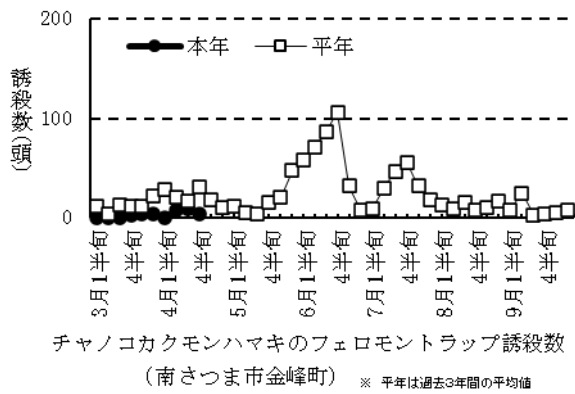
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発生量	並	やや少
発生ほ場率	0% (平年 1%)：並	0% (平年 3%)：やや低い
㎡あたり虫数	0頭 (平年0.01頭)：並	0頭 (平年0.13頭)：やや少
【南さつま市金峰町のフェロモントラップ】		
誘殺数 (3月1半旬～4月4半旬)	34頭 (平年177頭)	547頭 (平年415頭)

※平年は、過去3カ年の平均





ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 防除は、摘採後できるだけすみやかに行う。農薬の使用にあたっては、摘採（収穫）前日数を守り、摘採前の隣接茶園へのドリフトがないように十分注意する。
- (イ) ジアミド系農薬に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(3) チャノホソガ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多

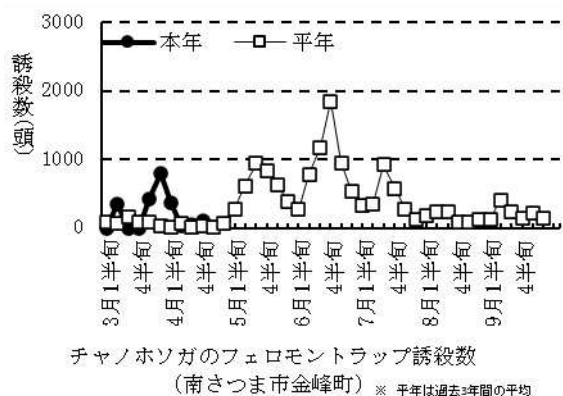
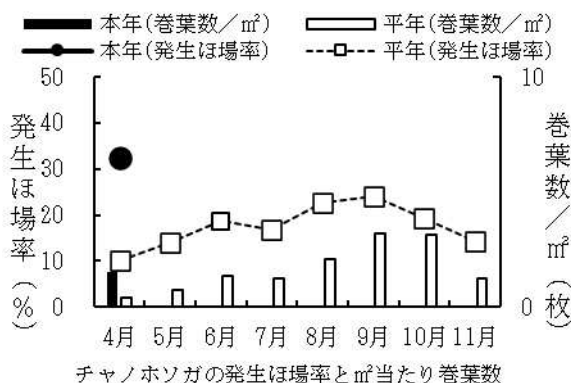
イ 予報の根拠

【巡回調査】

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率 33%（平年 10%）：高い
㎡当たり巻葉数 1.5 枚（平年 0.4 枚）：多

【南さつま市金峰町フェロモントラップ】

誘殺数（3月1半旬～4月4半旬） 1954 頭（平年 658 頭）※平年は、過去3カ年平均



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 第一世代成虫の発生時期と二番茶の新芽生育期が重なる園や品種では、萌芽から一葉期に防除をする。
- (イ) 二番茶期は、萌芽から摘採までの期間が短いので、薬剤の使用時期（摘採前日数）に十分注意する。

(ウ) IGR 剤及びジアミド系農薬に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(4) チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ

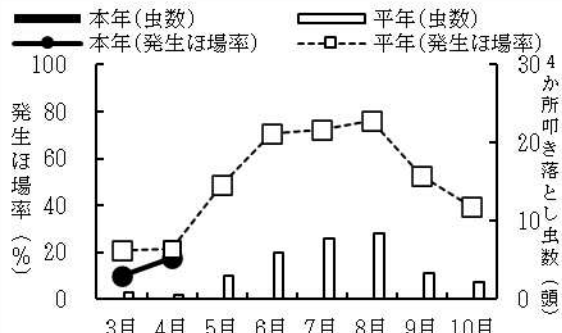
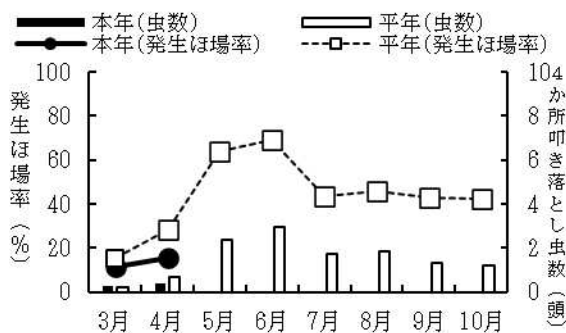
ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ 少
チャノキイロアザミウマ 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果

【巡回調査】	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
発生量	少	並
発生ほ場率	16% (平年 28%) : 低い	17% (平年 21%) : 並
虫数 (4 か所たたき落とし)	0.4 頭 (平年 0.7 頭) : やや少	0.2 頭 (平年 0.6 頭) : やや少



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 薬剤防除は二番茶及び三番茶の萌芽～1葉期に実施する。

(5) カンザワハダニ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多

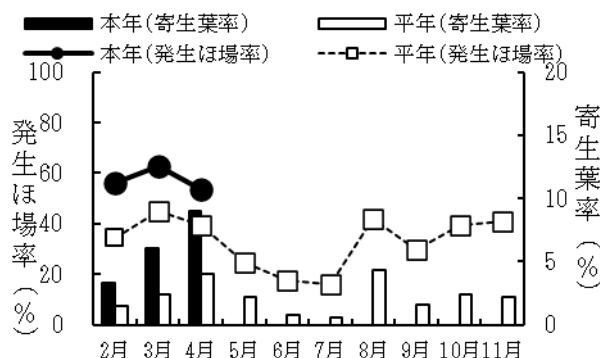
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率 54% (平年 39%) : やや高い
寄生葉率 9.0% (平年 4%) : 高い

- (イ) 発生程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生の多いほ場では、一番茶の刈番茶摘採後に防除する。



防除に関する今月の留意事項

1 チャトゲコナジラミ

本年4月の発生ほ場率は本年53%（前年53%）、寄生葉率3.4%（前年4.3%）で前年並みだが、発生程度が中発生のは場がみられる。

- (1) 農薬防除を行う場合には効果の高いアプロードエースフロアブルを使用し、若齢幼虫期に散布する。
- (2) 第一世代のクワシロカイガラムシのふ化最盛期とチャトゲコナジラミの若齢幼虫期はおおむね同時期であるので、同時防除を行う。
- (3) 幼虫は葉の裏のみに寄生し、裾部と葉層下部に寄生が集中することから、防除の際は葉裏に付着するように丁寧に農薬散布を行う。また、裾刈りはチャトゲコナジラミの除去効果と葉裏への薬剤付着性が高まり効果的である。
- (4) 本虫には天敵シルベストリコバチが有効なため、本天敵に影響の少ない農薬を使用するように努める。

2 農薬の使用について

農薬の使用にあたっては、摘採（収穫）前日数を守り、摘採前の隣接茶園へのドリフトがないように十分注意する。また、収穫前のは場はお知らせ旗などを利用して周知に努める。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には農薬がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は、住宅地及び畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平均値を使用。